

(2) 自然環境

1) 地形と地質

本史跡は、筑後川の中流域左岸に発達した段丘上に立地し、遺跡の南東には耳納山地が控えている。

筑後川は阿蘇外輪山に源を発し、日田盆地で周囲の小河川を吸収して大河へと成長する。その後、西へと流れ出し、福岡県内に至って平野を形成しつつ、市街地の北西付近で流れを南西へと転じ、福岡・佐賀県境を曲流して有明海へと注ぐ全長 143 kmの九州一の大河である。

耳納山地は山岳部の東側に花崗岩も見られるものの、大部分は三郡一周防変成岩を基盤としており、北麓から西麓にかけては後期更新世低位段丘堆積物からなる段丘や台地が広がっている。筑後国府跡は筑後川を望む台地上に営まれており、北側には後期更新世－完新世海成または非海成堆積岩類からなる沖積層が広がっている（図 2-1-3）。

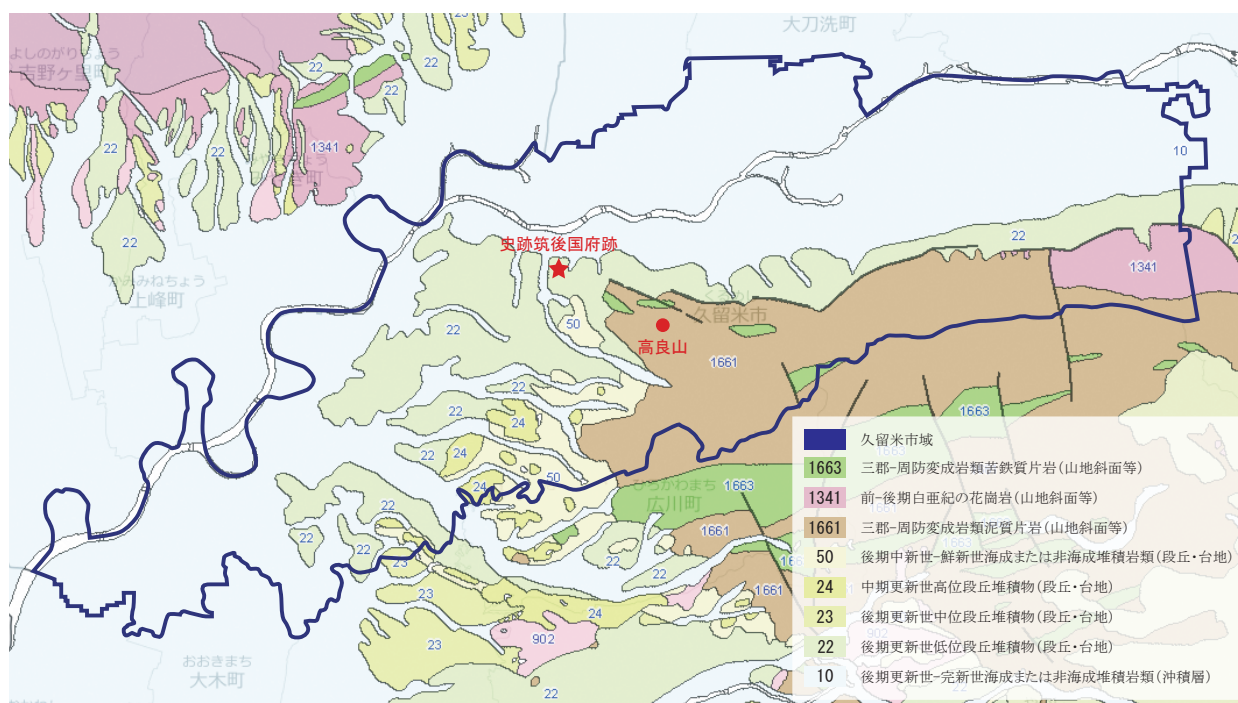


図 2-1-3 久留米市地形・地質図

(産業技術総合研究所地質調査総合センター「20 万分の 1 日本シームレス地図」一部改変)

筑後川によって形成された自然堤防や微高地、また、耳納山地の複合扇状地、段丘には、多くの遺跡が展開しており、本史跡もその一つである。高良山から北西へ派生した段丘の南よりには水縄断層帯が東西にのび、断層崖を形成している。崖下にあたる北側には標高 10 m から 20 m ほどの低位段丘が、崖上にあたる南側には標高 30 m 前後の中位段丘が広がり、この低位段丘上に前身官衙、I・II・III 期政庁、国司館および在国司居屋敷が、中位段丘上に IV 期政庁が位置している（図 2-1-4）。



図 2-1-4 筑後国府跡航空写真（平成 24 年撮影）

2) 気象・植生

本市の気候は内陸型の有明海気候区に属する。平成 26 年（2014）から令和 5 年（2023）までの過去 10 年間の年間平均気温は 17.4℃、年間降水量は 2,090.0 mm で福岡県内では暖かく雨の多い地域である。近年では豪雨による浸水被害に見舞われることが多くなっており、筑後川への合流地点付近では、中小河川の内水氾濫が頻発している。また、市街地部では、頻発するゲリラ豪雨などによって、小規模で局所的な浸水被害が発生している。

幸いにも本史跡に関して大きな被害は受けていないものの、最大規模の降雨により筑後川が氾濫した場合、前身官衙地区・II期政庁地区・国司館地区は浸水想定区域に該当している。

本市は筑後川と耳納山地に代表される水と緑に囲まれた環境にあり、そこで育まれた動植物も多い。筑後川中流域には、水際にエビモ、ヤナギモなどの沈水植物、ヤナギタデ、ミゾソバなどの湿性植物、低水敷にツルヨシ群落、高水敷にはオギ群落が広く分布し、水際の植生も多様である。高水敷には九州北部では希少なセイタカヨシ群落も分布している。また、河岸にはオオタチヤナギ、エノキなどの高木が点在する。

高良山はコジイを主体とする常緑高木林で覆われているが、一部には常緑高木林のシイ林の自然植生やクスノキ人工林が見られる。また、シダ植物の宝庫でもあり、ここを基産地とする種にコウラカナワラビがある。